

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。

## 念佛の攝むる諸經と諸善

(附念佛門に於ける階級觀念)

梅 村 舜 道

佛教は即ち釋迦牟尼佛を根本とする。是は申すまでも無いことのやうであるが此をぐらつかしてはいかぬ。佛陀大般涅槃の後に於ける佛教徒は、釋尊の遺法を中心として歸敬せねばならぬ、此も申すまでも無いことのやうであるが、ぐらつかしてはいかぬ。釋尊の遺法と申すもの大小八萬四千と號する、此も申すまでも無いやうであるが、ぐらつかしのはいかぬ。故に各宗の祖師に於ても、亦今日の吾等に於ても、凡そ佛教徒たるものは、南無大恩教主釋迦牟尼如來の一句に基づかねばならぬ、此も

申すまでも無いやうであるが、ぐらつかしてはいかぬ。

南無大恩教主釋迦牟尼如來の一句に依りて出で起ち給へる吾が宗祖上人の指南に據れば、茲所に一寸大に申さねばならぬことは、此の南無大恩教主釋迦牟尼如來に至るまでには、一切の教法の中には選びて獨り佛教に歸依すと云ふ、根本的選擇の決定が已に此所までに行はれて居る、是れは佛教徒として從來も今日も行はれて居る三歸と云ふもので、此も申すまでも無いやうであるが、ぐらつかしてはいかぬ。近來大に此の點がぐらついて居るやうであるから、特に注意反省が必要である。扱て上人の指南に依れば、一代佛教を聖道教と淨土教の二つに見立つるのである。此の二つの中且らく聖道教を擱ゐて、淨土教に趣くのである、淨土教の中に雜行と五正行のある中、雜行を選び捨てて、五正行を選び取るのである。五正行の中には猶ほ稱名正行を専らにして、餘の四行を傍らにし、第二段として、獨立一行の念佛に結歸するのである。此が選擇の道程に於ける徹底である。上人立教開宗の根本義である。

扱て、口稱一行の徹底、南無阿彌陀佛のみが、上人の立教開宗の根本義であるとすると、此所に種々の疑問が蔚然として起つて來る、菩提心を如何する、讀誦大乘はどうじや、理觀をどうする、殊に大乘圓頓戒はどうじや、諸善萬行が廢れるではないか、佛法が滅びるでは無いか、道德律が立たぬではないかと。數へ來れば實に際限がない。此れが實に上人の立教開宗と共に、南都にまれ、北嶺にま

れ上人の四周に湧き上ぼつた批難攻撃であつたのである。此の批難攻撃のたゞ中に立ちて、いたいたしくも亦涙ぐましくも、亦復雄々しく進み給へるが、上人御一生の道跡であり、選擇本願の法施の樹立であつた。

北嶺三千の衆徒が佛法亡びなむすと怒りくるうて嗷訴するに對しては、佛法は萬年なり、何ぞ人の力に依らむやと答へ、念佛も亦佛法にあらずやと酬る、菩提心を以て責むるものに對しては、諸宗各々菩提心あり偏執すべからず、我宗は我宗の菩提心ありと挑ね、戒は佛法の大地なりとして、戒を重んじて、念佛を輕ろむする人々に對しては、情々經意を案するに、戒は佛の本願に非らず、此の非本願にして亦釋迦の附囑にもあらず戒などを以て、本願念佛を抑へるが如きは、不明の至りで歎くべきだと教へ。亦佛學理觀こそ佛敎の生命なれと執するものに向ひては、佛學理觀は是れ佛の本願にもあらず、又吾等の分際にての佛學理觀を以ては到底生死を離るべからずと諭し、されど念佛の信行樹立せむまでは佛敎を學ぶべし、淨土門の人々も亦須らく一切經を學びて其の旨趣を知れと指導し給ふたのである。

此の外諸種の疑難ありて、一々祖訓明かなりと雖へども、今茲に悉くするは出來ないが、唯本宗に在りて宗脈を尊び、亦戒脈を重んじ、殆ど二元的になり來れるは、果して宗祖の立敎開宗の根本意たる選擇獨立一元の御意に副ふものであるか、深き疑惑や挾まざるを得ないのである。

宗祖が果して一方には、叡山圓頓一乘戒の嫡統として立ち、又他の一方には選擇本願の獨立念佛宗の開祖として起ち給ひし歟。本宗に於ける戒脈と宗脈と云ふやうな二元的曖昧は如何に決着すべきものである乎。是れ未だに未解決の問題であるらしい。宗祖の唱導せられたる選擇本願の念佛は、戒法の助けを借らなければ立つことのでき無い亦危ふい、弱いものであつたであらうか。此も本宗としては未だに解決のつかぬ問題であるらしい。竊かに惟ふに、日本念佛獨立の別宗開創者たる法然上人が叡空より圓頓戒を受けたる嫡統者、たることに戀々と顧着して一生此を離捨することが出来なかつたと見るのは、餘り上人が選擇廢立の開宗の眞意を没却したるものと謂はねばならぬ。選擇集の第十二章段には、戒法を所廢の行の中に入れられて居る、そうして其の當時の人々が、戒法は佛法の大地だと云うて、念佛を抑へるやうにして居るのは、甚だ不都合の至りだと歎かれて居る、此の選擇集の文を一體どう解釋するのか。又本願の念佛は獨り立ちをさして、助けさゝぬなり、助けと云ふは、持戒をも助けにさし、慈悲をも助けにさし、道心をも助けにさすなりと云ふ法語をどう安立するのであるか。予は宗祖が叡山の圓頓戒の嫡統であるから一生此を捨てることが出来なかつたとか、又戒は佛法通途の大地であるから、戒で念佛を護つたとか、念佛ばかりでは盲目も同然であるから、盲目念佛の危ふさを戒で助けたのだと云ふやうなことは、不徹底極まる愚論であると謂ふ。此れでは却つて宗祖の立教開宗の素意を盲目にしてしまふものであらねばならぬ。

夫れでは、宗祖が一生の間、随分王侯貴紳等の爲めに度々授戒をなさつた事蹟は恚う見るかど云ふ疑問が起る。此れは一寸難問題であるが、勅傳等には授戒では無くして、多く説戒となつて居るゝある、自分は此れが本當であると思ふ。若し授戒とあらば、それは傳記者の誤りであると惟ふのである。

宗祖が他から請待せられて、其の出張先きで、三師七證の授戒を成されたとか。又は相手に自誓受戒と云ふやうな、聖道の眞劍なことを勧められたるとは、恚うしても受け取られぬ話である。又其の求道の門出に於て、佛教廣しと雖へども、所詮戒定慧の三學を出でず、然るに我が身に於ては此れを一戒をも持たず、如何せむと歎かれ、終に善導の一心專念彌陀名號の文に依りて偏に念佛を緯として光明を見出されたる上人が、相變らず聖道圓戒の嫡統として、他から請待さるゝまゝに靦然として戒師となられたと云ふことは、如何にも矛盾の甚しきのみならず、僞瞞の沙汰であると申さねばなるまい。當時圓戒は僧俗一般佛教界に非常に重んぜられたことは申すに及ばぬ、斯の堅壘を踰へると云ふことは宗祖としても非常に難關であつたに相違ない、併し個の難關が打ち超えることが出来ぬやうでは、何の爲めの選擇本願の主唱者であるか、後人をして甚だ諒解に苦しましむるものであると申さねばならぬ。當時聖道の僧侶達がたとひ念佛を打斃することが出来ぬまでも、何とかして、念佛に搗き交せても圓戒の生命を延長したいと藻掻いたことは瞭々たる事實である。故に此等の僧侶達は、法然

房の念佛の極意は圓戒であると主張した、されば法然上人の最も心髓を傳へられたとする、聖光上人は此等の説に大に惑ふ處があつて、態々法然上人へ決判を乞はれた、此の返事に法然上人は、念佛の外に金剛寶戒即ち圓頓戒を主張して居るやうなことは決して無い、釋迦彌陀を以て證とする、其の上  
に梵釋四王を以ても證とするなど、恐ろしく金剛寶戒を撥ね附けられたのである。斯程迄師弟共に圓戒の取扱ひに苦心を成されたのは、全く當時聖道特に天台宗の生命とする圓戒の堅壘を打ち破ぶるの  
が困難であつたと云ふ證據にはなるけれども、決して法然上人が之を主張せられた跡は無いのである  
寧ろ圓戒は所廢の行であると云ふことを知らすることに如何に苦勞なされたかと云ふことが歴々たる  
ものである。此の點は猶意を盡くさないやうであるが予は本宗の識者の諒解を得たいと願ふので、別  
の機會に於てでも、議論の爲めの議論で無くして、能く練り合ふて是正すべきものは須らく是正がし  
たいのである。

所が此を説戒と見れば、之れは何の事は無いのである、廣學の上人が人から戒法の事を聞かれた時  
に戒法の譯柄を説いて聞かす、天台學の事を聞いた人に天台學の道理を説く、華嚴學の事を聞いた人  
に華嚴學の譯柄を暢べる、眞言、禪、法相の事を尋ねた時に一々之を説明する、之には何の不思議も無  
いことである。上人は亦淨土宗の學者須らく一切經を學ぶべしと教へ、諸宗各々一切經ありと主張せ  
らるゝ淨土宗に於いて、一切の教法を無礙に學することは、寧ろ大に必要であらねばならぬ。凡そ聖

淨二門の取捨選擇と云ふことも、能く當體を吟味せねは出來ぬことである。乃で上人が念佛の外に、戒とか禪とか、華嚴とか天台とかを人に説明せられたと云ふのは、ありがちの事で、所謂隨機の說法所廢の善巧である、上人隨自の主張は唯念佛に在ると云ふことは最早や一點疑ふ餘地は無いと惟へるのである。

所が圓戒が本宗に於て重んぜらるゝやうになつたのはどう云ふ譯かと云ふことを考へて見るに、中古已來、唯念佛のみではどうも一宗として各宗に對抗するには物足らぬ、是れには矢張り大戒を盛り返へして、見へを張つてでも少くとも淨土の僧侶なりとも、天下の大僧として諸宗に向はねばならぬ此には丁度宗祖が圓戒の受傳者であつたと云ふ事實もあるのだから、此の方面を復興するのは洵に都合が良い、乃で一旦宗祖が捨てられた圓戒をば再び復興さして、念佛宗を助けやうと努めたのである。それがだんだん後に至りて、特に徳川世に至り封建制が確定して、淨土宗が其の保護の下に立つことになつてからは、圓戒は彌々必要物となり、どうも宗義とは調和のとれぬ物柄であるにも拘らず、時には宗脈をも超えて戒脈などが上位を占むるやうになり、又或る時は宗戒二元的となり、又或る時は念戒一致の調和説となり、甚だ厄介なる歴史を以て今日に流れて來て居るのである。所が或る時代の背景に依りてどうしても隨他扶宗の爲めに圓戒が必要であつたとすれば、それも止むを得ないこととして、常に宗祖の廢立選擇の根本義を没却せぬやうにせなければ不都合であると惟ふ。宗祖

が圓戒を所廢の行に入れられたことは前に云ふ通り寧ろ諍ふ餘地の無いことである。當今封建制も既に破ぶれ、殊に宗祖の立教開宗の眞意を偲ばねばならぬ時、此の取捨選擇は識者を持たずして明かであると思はれる。

次に念佛とはどうであるか、選擇本願の獨立念佛は即ち法藏五劫の思惟、長載の萬行、現在正覺彌陀世尊の果體である。果號の中には即ち彌陀の内證外用を悉く攝め、一切の萬德萬法を歸入して漏らす所は無い、之を念する人々に悉く讓づり給ふのである、されば念佛に不足の物ひを爲す勿れとは宗祖の極力主唱し給ふ所で、經には一念大無上功德と歎せられて居る。されば念佛の中には固より圓戒の功德も、菩提の功德も、般若の功德も、精進、忍辱、禪定の功德も、説法利生の功德も、恭敬仁愛相互扶助の功德も、あらゆる善を攝めて餘りあるのみならず、此等世出世の一切の善の本であり、根である。されば念佛をば亦多善根、勝善根、大善根と申すのである。何の不足がありて、或は別に持戒を以てすけにさし、慈悲を以て、すけにさし、道心を以てすけに爲す要があるうぞ、若し他のすけを要すやうに考へたならば、此れは遠く彌陀の本願を疑ふのみならず、釋尊の指讚に背き、又近くは善導法然兩師の指南を無視するものである。

念佛の中に一切の世出世の善を含むで居ることは是の如くである、此も詳しきことは際限の無いことなれども、有信の人は能く恭心に思惟し給へ。



次に八萬四千の要法と念佛とはどうであるか、淨土宗の心は、八萬四千の法門悉く念佛に攝まると習ふのである。されば法華も念佛におさまり、華嚴も念佛におさまり、眞言も念佛におさまり、禪も念佛におさまり、唯識も念佛におさまり、八不中道も念佛におさまり、一切の眞法は悉く念佛におさまりて、更に餘法は無いのである、即ち彌陀の果號は法界眞理の極成結晶たるが故である、若し祖訓に基づかむと欲する人は、須らく宗祖の和字三部經合釋を見るべきである。

されば念佛心中に般若を見るは、即ち念佛の功德の内包を見る人である、念佛心中に華嚴を見る人は亦念佛の功德の内包を見る人である、即ち念佛の功德の内包を見る人である、念佛心中に法華、禪門、眞言等を見る人は亦復念佛の功德の内包を見る人である、即ち萬法念佛に漏れざるからである。猶ほ亦念佛心中に食作法を成し、施餓鬼を行ひ又は人道的一切の善根を成すは即ち念佛の功德の流れである。宗祖の語に曰はく、念佛は主人の如く、諸善は從者の如し、主動けば即ち從隨ふなりと、念佛は即ち諸善の根本であるからである。尊徳なるかな彌陀の果號や、廣大なるかな、念佛の信心や、念佛に不足の思ひを爲すこと勿れ、念佛は是れ萬善の妙體であると云ふ祖訓洵に吾人を欺かずと云ふべきである。深く信受すべきであると思ふ。

次に起るべき問題は、淨土宗は唯南無阿彌陀院である、智者も愚者も差別は無い、善人も惡人も差別は無い、源空も佛助け給への南無阿彌陀佛である、阿波之介も佛助け給への南無阿彌陀佛である

熊谷も、強盜の張本も、遊女達も、同じく佛け助け給への南無阿彌陀佛である、徹底同朋主義である同行主義である、僧俗と云ふやうなことも決して、頑定、固定或は階級的のものではあり得ない。恚こうなると浄土門念佛宗に於ては、全く階級觀念亦其の事實は無いのであるかどうかと云ふ問題である所が私は依然浄土門念佛宗に於ても、階級觀念及び、其の事實はあるべきものであると惟ふ。既に此土の修證の淺深高下に依りて、彼土の往生に九品の差別があり、九品も一往であつて、やがて八十一品ともなり、亦往生土を見る千殊萬様ともあり實には無量の差別を認むるのが經釋の意である。又浄土宗は往生をその當體とするけれども、往生の目的は亦更に成佛である、されば往生以後に於て十地の願行は自然に成ずると雖へども、而も常に下位は上位へとの不斷の向上であらねばならぬ。されば往生教念佛に於ても、階級の觀念及び事實は儼存して居ると云はねばならぬ。併し念佛門に於ける此の階級意識は何を標準とすべきである乎。固より世間的地位とか、財産とか、又は學識とか、善行とか、經驗とか、年功とか、年齢とか、此等の一或は凡てを以て、念佛門の階級意識の標準とすることは不徹底でもあり、固より意味を成さぬ、此等は世間止むを得ぬ差別相と云ふに過ぎないのであるが念佛門の階級意識とは自ら別問題であらねばならぬ。又人爲的僧階等の如きも到底眞實相の標準とすべきでないと云ふことは亦論する迄も無かろう。然らば念佛門には平等で更に差別は無いのであるか、たとひ源空も阿波之介も同じく助け給への念佛なればとて、阿波之介が直ちに法然上人と地位を轉

換したり、何等の差別が無いと云ふべき意味でも事實でも無い。其の平等なるは本願攝化の方を云ふので、衆生の方は常に各別でなければならぬ。即ち法然上人が、各人皆我が分に醒めて往生の得分を心得よと仰せられたるは全く此の意味に外ならぬと思はれるのである。

然らば淨土門に於ては何を以て階級意識の標準と爲すべきであるか、予は此れは矢張り佛教普通の標準を以てすべきであると思ふ、即ち自覺と覺他と覺行究滿し給へるが無上最上の佛であり、自覺と覺他がありて覺行を究滿せざるが菩薩である、自覺のみありて、覺他の乏しきが二乗である、自覺も無いのが凡夫である。其の凡夫の中に於て上下あり、更に下りて三途があると云ふのが佛教普通の階級標準で菩薩以下更に幾通りかの高下があるのである。然るに一切機根の差別上下の真相を知悉する知根差別智力と云ふのは佛の十力の一で菩薩も此を完全に具へて居らぬ、況や凡夫をやである。此に於て同一念佛門に於ても機根の差別上下の存することは事實であるけれども、此が眞實相は唯偏へに佛知見に俟たねばならぬのである。

扱て自身は現に是れ罪惡生死の凡夫として偏に彼の大悲の願力を仰ぐ者としては、固より自身の機根の上下、如實の當體は知ることが出来ぬとしても、亦復人の機根の上下の如實を知る明無しと雖へども、憍慢と弊と懈怠とを排して、念佛に精進せむと志す淨土門の人は、恭心に自他の上に如來の照見を仰ぎて、努めて其の眞實に隨喜恭敬せむとするのが當然の態度であると信するのである。

上來の問題は、輕々に論斷すべきで無いことは固よりで、予が論述も甚だ盡くさない所があると思ふ。特に此れ等の諒解及び其の實際の運用等に就きては、筆端の上のみでは不可能であるとも思はれるから且らく筆を擱きて博雅大士の示教を俟つことにする。(一二、二、十四、鹿谷にて)

## 當麻曼陀羅の疑點に就て

石 橋 誠 道

奈良時代の佛教美術は、随分豊富ではあるが、其中當麻曼陀羅は、最も優秀なものである。而して此の曼陀羅が、今日に至るまで、我が淨土教に於て、如何に多大な影響を及ぼしたかといふこともまた喋々する必要はない。此の曼陀羅の根源は勿論善導の觀經の疏であり、それに依つて善導が畫かれた淨土の變相が三百鋪もあつたといふことが、彼れの傳記に出てあるから、それが東西の諸國に展轉して、遂に我國までも傳つたに相違ないと思はるゝが、當麻寺の淨土の變相、即ち當麻曼陀羅は、それを轉寫したものであらう。そしてそれが、たとひ剝落して殆んど其佛像の形體を知ることさへも出來ないやうになつたとしても、一千百有餘年の今日まで、なほ保存されたといふことは、實に有り難